

魂とその根底

——ライプニッツからシェリングまでの美学的言説の系譜学の試み——(I)

小田部 胤 久

バウムガルテン（一七二四—一七九〇年）は『形而上学』（第五二節）において、「魂のうちには不明な表象が存在する。その総体は魂の根底（*Fundus animae, der Grund der Seele*）と呼ばれる」（*Baumgarten, Met., § 511*）と述べている。「魂の根底」とは、すでにライプニッツ（一六四六—一七一六年）のうちに散見される概念であるが、バウムガルテンが『形而上学』において用い規定した術語であり、彼の「感性的認識の学」ないし「下位認識能力の学」としての「美学」の構想を支える概念の一つである。とともに、この概念はバウムガルテン以後の美学的言説——以下では単に哲学的芸術論という狭義における「美学」にかかわる言説のみならず、むしろ感性的ないし身体的要素を人間にとって不可欠なものとみなす言説を美学的言説と呼ぶ——に根本的な影響を与え、直接的にはヨーハン・ゲオルゲ・ズルツァー（一七二〇—一七九六年）およびモーゼス・メンデルスゾーン（一七二九—一八〇六年）の感情論のうちに、さらにはヘルダー（一七四四—一八〇三年）の発生的ないし生理心理学的議論のうちに、間接的にはシェリング（一七七五—一八五四年）の美学的言説のうちにまでその影響を読み取ることができる。以下本稿は、この概念の系譜学の試みである(2)。

一 十分な根拠としての魂の根底

すでに触れたように、「魂の根底」という表現は、バウムガルテンに先立ってライプニッツがすでにさまざまの箇所で見ている。ライプニッツの用法は、バウムガルテンのそれとは基本的な点において異なるが、バウムガルテンの議論の独自性を明らかにするためにも、ライプニッツの用法を検討することから始めよう⁽³⁾。

ここでまず、『人間』知性新論(一七〇三年執筆、一七六五年歿後刊)に見られる次の用例に着目しよう。「神」の観念のような生得観念は「われわれの魂の根底に (dans le fond de nos âmes) ある」(Leibniz, V, 68; NE, I.IV) あるいは「精神」(すなわち必然的真理を認識する限りでの魂)は幾何学などの必然的真理を「自己自身の根底から自ら引き出す (tirer de son propre fonds) ことができぬ」(V, 76; NE, I.IV)。こうした用例が示すように、ライプニッツは「魂の根底」という概念は生得的ないし必然的真理を論じる文脈において用いている。

ライプニッツは具体的に、プラトンが対話篇『メノン』(八二B—八五B)において示している想起説の例、すなわち「子供に何も教えることなくただ質問のみによって難解な真理へと子供を導くソクラテス」の例を引き合いに出す(V, 76; NE, I.IV)。それは、子供であってもソクラテスの質問に答えることによって自ら幾何学の真理を証明しうる、という例である。だが、子供の精神が幾何学の真理を「自己自身の根底から引き出すことができる」といっても、そのことは、ソクラテスによる質問を必要としない、ということでもなければ、あるいは実際の作図を必要としない、ということでもない。幾何学の真理を証明するには、たしかに実際に作図しなくてはならない。「何か感覚的なものを必要としないような抽象的思考をわれわれは持ちえないであろう」。ライプニッツにとって、心身の結びつきは人間にとっての基本的条件である。だが、このように感覚的なものが必要であるということは、「精神が必然的真理を自己自身の根底から引き出すことを妨げない」(74; *ibid.*)。たしかに「感官」は「精神」が必然的真理に気づくための「機会を与える」という点で「不可欠」であるとは

いえ、「感官は〔真理の〕必然性を洞察させるには不十分である」。この意味において、「精神は必然的真理を自己自身の根底から自ら引き出すための態勢 (disposition) を有している」(76; ibid.) と語られる。

だが、より正確にいうならば、「魂の根底」がかかわるのは単に必然的真理に限られない。実体間の相互影響を認めず、いわゆる予定調和説を採るライプニッツは、「実体の本性および実体の交通並びに精神物体間に存する結合についての新説」(第一四節)において次のように述べている。「神がはじめに精神または他のあらゆる事象的統一体を創造した際、その精神に生じるすべてのことが、精神そのものから見ると完全な自発性によっていながら、しかも外界の事象と完全な適合を保って精神そのものの根底から生じる (nature de son propre fonds) ような具合にしておいた」(IV, 434)。すなわち、必然的真理にとどまらず、魂に生じる事柄すべてが、実は魂の根底に由来する。それゆえに、「われわれの観念、いや可感的な事物の観念さえも、われわれ自身の根底から生じる」(V, 16)。換言するならば、魂こそが「観念の源泉にして根底 (fons et fundus idearum)」(II, 172) ないし「活動性の根底 (activitatum fundus)」(II, 171)である。

このようにライプニッツは「魂の根底」という概念を、経験主義の基本的立場——すなわち魂を「タブラ・ラサ」(V, 45; NE, pref.)とみなし、すべては感性的経験に由来するという立場——を批判する文脈において、魂の活動の自発性を保証するものとして用いている。魂の「根底」とは、ライプニッツにおいて、魂に生じるすべての事柄、すなわち、魂に生じた、生じている、そして生じるであろうすべての事柄にとっての「十分な根拠」にほかならない。

二 不明な表象の総体としての魂の根底

ライプニッツとは異なり、バウムガルテンは「魂の根底」を「不明な表象の総体」と定義している。ただし、バウムガルテンによる「不明な表象」の規定は、基本的にライプニッツの議論を踏まえている。ここではまずライプニッツの論考「認

識、真理、観念についての省察」(一六八四年)に注目しよう。この論考はライプニッツが自ら公刊した数少ない哲学上の論考のなかで当時から広く読まれており、ヴォルフ(一六七九—一七五四年)およびヴォルフ学派への影響力も大きかったからである。

ライプニッツは次のように述べる。「認識は不明な認識(cognitio obscura)と明晰な認識(c. clara)に分かれ、明晰な認識はまた渾然とした認識(c. confusa)と判明な認識(c. distincta)に分かれる。判明な認識は、不十全な認識(c. inadaequata)と十全な認識(c. adaequata)に、あるいはまた記号的認識(c. symbolica)と直観的認識(c. intuitiva)とに分かれる。認識が十全で同時に直観的であれば、それは最も完全な認識である」(422)。

認識は不明なものから明晰なもの、判明なもの、さらには十全なものへと上昇していくが、この上昇を支えているのが表象(あるいは概念)の「分析」である。つまり、認識の明晰・判明性の度合は、表象がどの程度分析されているかに対応する。具体的にライプニッツの論述に沿ってそれぞれの階梯について見ておこう。われわれがある概念の表象している事象をそれとして同定ないし再認しえない場合、その概念は不明である。それに対し、そのような同定が可能である場合、概念は明晰である。明晰な認識が判明であるのは、ある事象を他の事象から区別するに十分な徴表(notae)を分析的に列挙することができる場合である。さらに概念の分析が究極までなされ、その概念がそれを構成する「原初的な概念」にまで還元される時、認識は十全と呼ばれ、これらの原初的な概念が記号を媒介とせずに一挙に思惟される場合、認識は直観的と呼ばれる。なお、不明な表象のみを有する魂は「全く裸のモノイド」(ゴットシェートの独訳によれば「眠れるモノイド」、バウムガルテンによれば「深い眼りのうちにあるモノイド」と呼ばれるの)に対し、「その表象がより判明で記憶と結びついている魂」が本来的な意味における魂と呼ばれる(VI, 610 ff.; *Monad.*, §§ 19, 23)。ただし、「その表象がより判明で記憶と結びついている魂」においても、「不明な表象」は存在する。不明な表象を持たないような魂は、神を除いて、存在しない。

ここで、ライプニッツのこの考えがバウムガルテンの「美学Ⅱ感性論」を支える枠組みを構成していることに注目しよう。

ライブニッツは渾然とした認識の例としてまず、「色、香、味、その他の感官の個々の対象」を挙げている(72)。たしかにわれわれは赤や青といった個々の「可感的性質」(VI, 500, V, 156; NE, II.21.iii)を相互に区別し再認できるが、しかし、赤とは何かと問われても、それを定義できず、そのために「感官の単なる証拠」に頼って実際に赤い色を示すほかはない(IV, 422)。さらに続けてライブニッツは次のような例を挙げている。「同様に、画家やその他の芸術家は、何がうまく、また何がまずく作られたのか、的確に認識しうるが、しかし自らの判断に根拠を与えることがしばしばできず、その根拠を問う人に対して、自分の気に入らない事象には何かはわからないが欠けたところがある、と語る」(ibid.)。「何かはわからないもの」曰く言い難いもの (*nescio quid, je ne sais quoi*)とは、一七世紀に「趣味」論が確立する際に「趣味」の原理として人口に膾炙していたものである。このようなライブニッツの考えが、バウムガルテンの「美学」感性論の背景をなす。渾然とした認識の特徴は、それを構成する徴表が不明にしか表象されない点にある。たとえば、「色や味」などの「渾然とした観念」は「無数の微小観念 (*petites idées*) の所産」であるが、これらの「微小観念」それ自体は決して「意識されな」(V, 469 f.; NE, IV.17.xiii)。あるいは、ライブニッツが好んで例に挙げる海のざわめきに即して語るならば、「このざわめきを人々が実際に聞いているように聞くためには、この全体を構成する諸部分を、すなわち個々の波のざわめきを聞いていなくてはならないはずである。無論、これらの小さなざわめきのそれぞれは、それが他のざわめきと一緒に作り出す渾然とした集合においてしか、つまりこの海鳴りにおいてしか認識されないものであって、この海鳴りを構成するこの波が単独であればそれぞれのざわめきは気づかれな」(V, 47; NE Pref.; cf. IV, 534; PNG, § 13)。この問題となっているのは感官の閾値である。閾値を下回る刺激はたしかに気づかれないが、しかし、こうした意識されない刺激は端的にゼロではなく、むしろそれらが集まって初めて意識される知覚が生じる。この意味において、渾然とした認識を可能としているのは意識されることのない不明な表象であるということができる。

バウムガルテンが「魂の根底」と呼ぶのは、まさにこうした「不明な表象の総体」にほかならない。バウムガルテンは自

らの「経験的心理学」の対象として「魂の根底」を主題化する。

三 二種の明晰性

バウムガルテンは『形而上学』において次のように述べている。「不明な表象が支配的であるような魂の状態は、闇の領域である。それに対し、明晰な表象が支配するような魂の状態は、光の領域である」(Met., § 518)。こうした光と闇の比喩はヴォルフにも共通するが(Wolff, Psychol. emp., §§ 35-36)、『ヴォルフが「表象の不明性」を「表象の欠陥 (defectus)」 (§ 36) とみなすのに対し、バウムガルテンはむしろそれを「魂の根底」として積極的に捉え返す。

ここで、バウムガルテンが認識の明晰性の階梯に「内包的明晰性 (claritas intensiva)」と「外延的明晰性 (c. extensiva)」という対概念を加えていることに注意する必要がある (Med., § 41, cf. Met., § 531, Aes., §§ 618, 885)。バウムガルテンによれば、明晰な表象は二種類の仕方で「より明晰に」なる。その一つは「内包的により明晰な表象」であるが、それはある表象がその徴表に分析され、この徴表自体が明晰に表象される場合である。そのとき表象は判明となり、それは認識の論理的完全性を構成する。この限りでバウムガルテンの議論はライプニッツの議論を全く踏襲している。バウムガルテンの独自性は、「美学―感性論」の扱うべき領域として「外延的明晰性」という第二の明晰性を導入したところにある。「表象Aの内」に表象B、C、D等よりもより多くのものども(=「徴表・規定性」が表象され、しかもこれらの表象がすべて渾然としているとき、Aは他の表象よりも外延的により明晰であろう」(Med., § 16)。ここで「外延的に」より明晰である、と呼ばれる理由は、先の内包的明晰性においては徴表の明晰性(という内包量)が増大するのに対して、ここでは徴表の数(という外延量)が増大するからである。むしろ、ここで論じられている表象は判明であってはならない。それゆえにバウムガルテンは、「しかもこれらの表象がすべて渾然としているとき」という限定を付す (ibid.)。一言でいえば、ある表象が他の表象

よりも多くの徴表を含みつつも、これらの個々の徴表に分析されることがなく、そのために渾然としている場合に、この表象は外延的により明晰となり、これはこの表象の質料的完全性を構成する。

すでに見たように、ライプニッツは表象の階梯を、不明な段階から明晰な段階を経て判明な段階へと上昇するものとして、すなわち判明性という唯一の目的を目指して展開する過程として捉えていた。これに対して、バウムガルテンはライプニッツから「微小表象」論を継承しつつも、表象の明晰性を二種に区別することによって、ライプニッツには認められない二元性を導入する。すなわち、バウムガルテンによれば、不明な段階から明晰な段階にいたった表象は外延的明晰性と内包的明晰性という相対立する目的を目指して枝分かれし、いわばY字型に展開する。人間の認識の完全性がこのように二つに分かれるのは、人間の認識がその有限性のゆえに個体と普遍（抽象概念）を同時に認識することができず、むしろ個体が普遍かという二者択一の前に立たされているからである。「論理的な認識および真理にいかにも優れた形式的完全性（＝内包的明晰性）が内在しようとも、この形式的完全性は、論理的な認識および真理における多大にして大量の質料的完全性（＝外延的明晰性）の損失によって相殺されなくてはならなかったことは、哲学者にとって今やきわめて明らかでありうる、と私は考える」（§ 560）。このようにしてバウムガルテンは、人間の認識の展開が二つの完全性へ向かって分かれたることを洞察しなかった従来の哲学を明確に批判する。「不明な表象」はけっして、ヴォルフが述べるように、「表象の欠陥」なのではない。むしろ、バウムガルテンは、「不明な表象の総体」としての「魂の根底」を、認識の「外延的明晰性」ないし「質料的完全性」と結びつけることによって、それ自体として肯定しようとする。

第一節で明らかにしたように、「魂の根底」という比喩はライプニッツがすでに「タブラ・ラサ」節を批判し魂の活動の自発性を主張する文脈において用いていたものであった。これに対し、バウムガルテンは「不明」な「感性的表象」の織りなす領野のうちに「魂の根底」を見出す。「この魂の根底はなお多くの人々に、いやそれどころか哲学者にも知られていない」（Baumgarten, Aes., § 80）¹ という一節は、バウムガルテンが「魂の根底」に着目する自らの議論の独自性ないし革新

性に十分意識的であったことを示している。『美学講義』には次のような一節がある。「われわれの魂の根底には驚くほど多くの表象が不明なままにとどまっているが、ときとしてその不明性が減少することによってこれらの表象は明晰性の領野といわば結びつく、というのがわれわれの魂のあり方である（この点について人々は心理学の改善以前には気づかなかつたのだが）。これらの不明な表象は厳密な意味において判明となることけっしてはなく、またなるはずもないが、しかし、美しい精神（『芸術家』の概念はすべてこの不明な表象によってより生動的なものとなり、また美しい精神は自分の忘れたものを、あるいはそれについて少なくとも忘れたと信じているものを、この不明な表象のお蔭で思い出す。明晰性の領野と、明晰性の領野に隣接するこの不明な表象の領野とが合わさって、美しい精神にとつての広大な領域をなす」（Kollegnachschrift, § 80）。「魂の根底」は、ライプニッツにおけるように、魂の活動の自発性を保証するものとして、すなわち魂に生じるすべての事柄にとつての「十分な根拠」として重視されるのではない。むしろバウムガルテンは、「魂の根底」に存する「微小表象」を心理学的に探求されるべきものとして主題化する。

五 感情論への展開

「魂の根底」を心理学的に探求するというバウムガルテンの構想は五〇年代から七〇年代にかけて感情論のうちに広範な影響力を發揮した。

まず、チューリヒに生まれベルリンで活躍したヨーハン・ゲオルゲ・ズルツァー（一七二〇—一九六年）の『全学問の概要』（第二版一七五九年）に着目しよう。二四〇頁からなるこの書物は、その書名の示すとおり、小さな百科全書ともいふべきものである——バウムガルテンの「美学」の構想への肯定的言及も見られる（Sulzer [Kulzer Begriff], § 72）——が、この「心理学」をめぐる彼の議論を取り上げる。ズルツァーは「経験的心理学」の重要性を指摘した上で、次のように続け

る。「これらの〔魂の不明な〕作用のいくつかは、もしもこれらの作用から生じる微かな変化をとおして自らの存在の痕跡を打ち明けなければ、魂の深奥 (die Tiefe der Seele) にあって気づかれることもないような性質のものである」 (§ 205)。魂の深奥——これはバウムガルテンのいう「魂の根底」と別物ではない——にうごめく魂の不明な作用は、われわれの閾値を下回るゆえに、それ自体としてはわれわれの意識しうるものではありえない。だが、この作用の生み出すくわすかの知覚可能な痕跡をも見逃さない「明敏さ (Scharfsinnigkeit)」 (ibid.) があれば、魂の深奥を間接的に探求することができる。『ヴォルフは判明な思惟と判断における知性の作用をきわめて的確に記述した』のであるから、今や必要とされることは、「(もしもそう呼んでよければ) 魂の不明な領野 (die dunkeln Gegenden der Seele) にきわめて正確な注意を向けること」であり (§ 206)、そのためには「ありとあらゆる狂気の発作を心理学的に丹念に記述する」ことも有用である (§ 207) とまでズルツァーは主張する。論考「理性の概念の分析」(一七六五年) においてズルツァーは、「愚行の起源」を「魂の内奥に隠れた事柄」のうちに発見しようと試みる (Vernische philosophische Schriften, I, 261)。とりわけ「魂の内奥」に焦点を合わせるズルツァーの構想もまた、芸術を一つの焦点とするバウムガルテンの「下位認識能力の学」(としての美学) とは異なった意味においてはあがあるが、すぐれた意味における「下位能力の学」にほかならない。

次に、デッサウのユダヤ人ゲッターに生まれベルリンで活躍したモーゼス・メンデルスゾーン(一七二九—一八六年)に注目したい。彼は論文「諸芸術の主要原則について」(一七六一年)において、「芸術」についての探求の意義を次の点に見出している。「芸術家の天分が感受し、芸術批評家が理性推理によって解明するところの美の諸規則のうちには、われわれの魂の最奥の秘密 (die tiefsten Geheimnisse unserer Seele) が隠されている。……それゆえに、哲学者が〔美の〕感情の痕跡をその不明な道のりに沿って追跡するならば、心理学における新たな展望が開かれるにちがいない」(Mendelssohn, I, 427)。芸術についての探求は同時に「魂の根底」(I, 393, 394) についての心理学的探求である、という若きメンデルスゾーンの確信(ここにはズルツァーからの影響も明確である)が読み取れよう。若きメンデルスゾーンは「感性的認識」(577)との

かわりて芸術について論じており、この点で彼の芸術理論はバウムガルテンの美学の構想と基本的に一致するが、「感情」に焦点を当てる点で、新たな美学のあり方を指し示している。

六 発生的および生理心理的展開

一七六〇年代末にヘルダーもまた六七年にバウムガルテンの『美学』（第一節から第二五節まで）と対決し、さらに六九年にはライプニッツの『人間知性新論』および「理性に基づいた自然と恩寵の原理」の摘要を作成し、とりわけ「微小表象」に関心を寄せている。

六七年の断章において、ヘルダーは次のように記している。「彼〔バウムガルテン〕は論理学を美学の姉と呼んでいるが、はたして美学が年齢上若いかどうか私にはわからない。というのも、下位認識能力は遙か先に展開するものであり、またまた先に展開されなくてはならないからである」(Werke in zehn Bänden, I, 666)。アリストテレス以来確立している論理学との類比において美学を構想するバウムガルテンとは異なって、ヘルダーは魂の根底を探求する学としての美学のうちに発生的ないし系譜学的方法を導入する。ヘルダーによれば美学とは「最も必要とされる人間学の一部である、というのも、魂の根底にこそ人間としてのわれわれの力強さが存するからである」(ebd., I, 665)。ヘルダーの発生的視점에即するならば、感性的認識の学としてのバウムガルテンの美学は、「誤った哲学的根から生まれた誤てる発生物」であって、発生的に認識に先立つ暗い感情の座としての魂の根底を捉え損なっている。

「その著作におけるバウムガルテンの思考様式について」という断章において、ヘルダーはメンデルスゾーンの論考「諸芸術の主要原則について」を自ら引用しつつ、バウムガルテンの美学の構想をメンデルスゾーンの線に沿ってさらに展開させる (Sämtliche Werke, XXXII, 135)。ヘルダーによれば、「この暗い根底のうちに」、すなわち「私の魂の感性、想像力と

趣味、感情と情念のうちに、「美しいものと善いものに対する私の全感情が横たわっている」(186)。そして、この「暗い根底」はまさに見通すことのできないものとして「深淵 (Abgrund)」とも呼ばれる。「人間の魂の暗い深淵を見下ろせ。そこでは動物の感覚が人間の感覚となり、いわば遠くから「人間の」魂と混じり合う。また、暗い思考の深淵を見下ろせ。そこからは後に衝動と情念が、快と不快が生じる」(XXXII, 186)。つまり、「美しいものの感情」の本質は、「一つの根本力、すなわち魂と身体を結合する紐帯」(Werke in zehn Bänden, I, 672)にはかならない。それゆえに、必要とされるのは単に発生的ないし系譜学的方法のみならず、生理心理学的方法である。

ヘルダーによれば、魂の根底ないし深淵は、「われわれの魂に対して後から塗られる像や色に多大の変化を加え陰影を与える」ものである。それゆえに、それは発生的に過去のものではなく、むしろ「魂における永遠の基底 (eine ewige Basis)」として現在においても作用し続ける (Sämtliche Werke, IV, 33, 29)。

こうした美学的言説はヘルダーの名著『人類歴史哲学考』(第二部一七八五年)に見られる彼の基本的な主張をも支えている。ヘルダーは、なぜ人間は本来自立的ではないにもかかわらず「自立性の感情」を有するのか、について次のような説明を加えている。「人間は自分の子供の時期を忘却している。すなわち、子供のときに受け入れた胚芽、いや実は今なお毎日受け入れている胚芽が自分の魂のうちに眠っているのに、人間は胚芽から成長した幹のみを見てそれを享受し、この幹の生き生きとした形姿に、また果実を結んでいる枝に喜びを感じる」(XIII, 343 f.)。われわれの子供時代は眠れる暗い表象として存続し、われわれの人生の永遠の基底をなす。そして、われわれは成人になっても「胚芽」を「毎日受け入れ」る点において、ある意味ではなおも子供であり続ける。眠れる暗い表象、すなわち「微小表象」の織り成す「魂の根底」こそがわれわれの同一性を構成する。ヘルダーによれば、哲学者の課題はこの忘れられた基礎を、すなわち「人間の生の発生と範囲」を追跡し、それを再び明るみに出すことにほかならない(344)。

このように考えるならば、ヘルダーの哲学はバウムガルテンの「魂の根底」の概念に発生的ないし系譜学のおよび生理心

理学的視点を組み込むところに特徴がある、といえよう。

七 芸術における魂とその根底

シェリングの芸術哲学はバウムガルテンの「魂の根底」の概念を直接継承するものではないが、バウムガルテンからヘルダーへといたる議論の展開の流れに即して理解することのできるものである。ここでは、シェリングのバイエルン科学院講演「自然に対する造形芸術の関係について」（一八〇七年）に着目することしよう。

シェリングによれば、芸術論においては、「魂なき身体」としての「外的形式」を重視する立場も、「没形式的なもの」としての「魂の秘儀」を重視する立場も不十分である（Schelling, VII, 295, 303）。すなわち、「形式の美」も、「概念のうちにある、魂から流れる美」も、それぞれ単独ではなお真の芸術美をなすものではない（296）。ここに示されている立場は、この講演から二年後に公刊された「人間的自由の本質について」（一八〇九年）の言葉を用いるならば、次のように定式化できるであろう。「観念論は、もしそれが生動的な实在論をその基底（Basis）として持たないならば……空虚で抽象的な体系となる。……観念論は哲学の魂であり、实在論は哲学の身体である。両者が合わさって、生動的な全体をなす。实在論はけっして原理を与えることはできないが、しかし实在論が根底と手段（Grund und Mittel）となることで、観念論は自己を現実化し、肉と血を得る」（VII, 356）。それゆえに、シェリングの課題は、芸術にとっての身体と魂、すなわち形式と概念（ないし本質）を結合し、芸術論上の实在論的立場と観念論的立場を総合することである。シェリングは、概念（本質）と形式の、あるいは魂と身体の間係を一種の運動として捉えることによって、この課題に答える。

シェリングによれば、本質（概念）という限定なきものが作品のうちに現実化されるには、それはまず形式によって限定される必要がある。というのも、「限定なくしては限定なきものは現象しえない」からである。それゆえに、芸術は、限定

なき本質（概念）と限定としての形式との間の「対立」として始まり、その「始まり」においてはまず限定なきものに対抗する「形式の最大の厳格さ」が前面に現れる（310 f.）。これが芸術論において一般に「特性的なもの（das Charakteristische）」（304）と呼ばれているものであり、芸術の第一段階をなす。

だが、「形式」は「本質なくしては存在しえない」（307）もの、「本質から流れ出る」（303）ところのものである。とするならば、形式が本質に対して「制限的である」（303）ことは本来ありえない。むしろ、本質（概念）は自己をまずは限定する形式を「完全に形成し尽くす」（311）ことによって、かえって「形式のうちに満足しつつ安らぐ」（303, cf. 311）にいたらなくてはならない。ここに「高次の自足した美」が成り立つ（307）。これが「特性的なもの」に続く芸術の第二段階を構成する。

芸術の第一段階と第二段階の関係について、シェリングは次のように註記している。「われわれはこの高次の自足した美を特性的と呼ぶことはできない、というのもこの「特性的という」語のもとに現象の制限ないし制約が理解されるからである。だが、この高次の美のうちにも特性的なものは見分けることのできない仕方で（ununterscheidbar）作用し続けた」（307）。この意味において「特性的なもの」は「崇高な美（すなわち高次の自足した美）が基づくところの深い根底（der tiefe Grund）」と呼ばれる（306）。芸術の第一段階をなすこの「深い根底」は、第二段階の「高次の自足した美」が成立したときにも、けっして過去のものとなるのではなく、仮にそれ自体として区別して捉えることができないにせよ、第二段階を支えるものとして存続する。「美の基礎（Basis）は、形式の美である。……かくして、特性的な美は美の根（Wurzel）であり、そこから初めて美が果実として高まりうる。たしかに本質は形式を越えて成長するが、しかしその場合でも特性的なものは美の常に活動的な基礎（Grundlage）であり続ける」（307）。このように考えるならば、形式ないし身体と概念（本質）ないし魂の関係は、「自由論」における実在論と観念論の関係と同様に、形式ないし身体が「基底」ないし「根底」となって概念（本質）ないし魂を支えつつ、後者が前者のうちに現実化し安らぐ、というものであることが明らかとなろう。

ところで、シェリングが「特性的なもの」という概念を導入する際に踏まえているゲーテの論考「蒐集家とその友人たち」(二七九九年)において、ゲーテは、「特性的なもの」と「美しいもの」の関係は「骨格」と「形姿」の関係に等しく、前者は後者の「根底に横たわる」、すなわち前者は後者を「根拠づけ (begründen)」、規定する (bestimmen)」が、しかし後者それ自体ではない、と主張している (Goethe, XII, 77)。「特性的なもの」が「美しいもの」の「根底」をなす、という点でシェリングはゲーテと考えを同じくするが、しかし、根底に関する両者の理解には小さな、しかし同時に決定的な相違がある。シェリングはゲーテの考えに対して次のような註解を加える。「自然における骨格は、……生ける全体から切り離されない。硬いものと軟らかいもの、規定するものと規定されるものが相互に前提し合い、ただ相関的のみ存在しうる、そしてまさにそのゆえに生ける特性的なものはすでに形姿全体——すなわち、骨と肉、能動的なものと受動的なものの相互作用からなるところの形姿全体——なのである」(Schelling, VII, 307)。重要な点は、シェリングにとって「根底」とはそれが支えるものをけっしてゲーテの語るように「根拠づける」ものではない、という点である。すなわち、「根底」とそれによって支えられるものは「相互に前提し合う」のであって、この意味において両者は一種の循環をなす。換言すれば、十分な根拠となることのない根拠としての根底がここに語り出されている。

「自由論」のシェリングは、こうした事態を踏まえて、次のように語っている。「一切の根拠〔根底〕に先立って、そして一切の現存するものに先立って、すなわち一切の二元性に先立って、ある存在者が存在しなくてはならない。これは根源根拠 (Urgrund)」、あるいはむしろ没根拠 (Ungrund) と呼ぶほかにいかに呼びうるであろうか」(VII, 406)。こうして「自由論」の末尾においてシェリングは、没根拠からいかにして二元性が成立するのか、そしてこの二元性はいかにして同一性へ、さらには統一へといたるのか、と問い進める。だが、美学的言説の系譜を辿ってきたわれわれは、むしろ科学院講演においてシェリングが指摘した根底とそれによって支えられるものとの間の「相互に前提し合う」循環にこそ着目すべきであろう。この講演においてシェリングは、芸術における魂とその根底との関係を主題としているが、この関係はそれに先立つも

のから論じられるべきものではなく、あるいは、どちらか一方に還元されるべきものでもなく、あくまでも両者の循環に即してその内側から論じられるべきものである。シェリングは次のように指摘する。「芸術は……最初の始まりから出発すべきであり、また生き生きと若返るためには、常に新たにこの始まりへと戻らなくてはならない」(324)。芸術はその根底としての始まりに立ち戻ることによって、その生命を獲得し、展開していく。こうした芸術の展開こそ、先の循環の持つ、ないし持ちうる豊かさにはかならない。

シェリングによれば、根底とそれによって支えられるものとの「相互に前提し合う」循環のうちに「深い根底」が「見分けることのできない仕方で作成し続け」ている。このことを明らかにする眼差しは、自らこの循環のうちに分け入り、現在をその根底に隠れた仕方でも横たわる「始まり」に即して捉えることのできるものでなくてはならないであろう。こうしたシェリングの思索のうちに、われわれは「魂の根底」をめぐるバウムガルテン以後の思考のすぐれた表現を見て取ることが出来る。

引用文献

- Baumgarten, Alexander [Aes.] Ästhetik, 2 Teile, Lateinisch-Deutsch, hrsg. von Dagmar Mirbach, Hamburg 2007. (バウムガルテン 『美学』松尾大訳、玉川大学出版部、一九八七年)
- Ders., [Kollegnachschrift]: In Bernhard Poppe, Alexander Gottlieb Baumgarten. Seine Bedeutung und Stellung in der Leibniz-Wolffschen Philosophie und seine Beziehung zu Kant. Nebst Veröffentlichung einer bisher unbekanntem Handschrift der Ästhetik Baumgartens, Leipzig 1907.
- Ders., [Med.]: Meditationes philosophicae de nonnullis ad poema pertinentibus, Halle 1935, in: Philosophische Betrachtungen über

einige Bedingungen des Gedichtes. Übersetzt und mit einer Einleitung herausgegeben von Heinz Paetzold. Hamburg 1983.

Ders., [Met.] *Metaphysica*, Editio I, Halle 1739., Editio IV, Halle 1757.

Leibniz, Gottfried Wilhelm: *Die philosophischen Schriften*, 7 Bde., 1875-90. Reprint: Hildesheim 1978. 「モノイドロジー」「理性に基づく自然と恩寵の原理」はそれぞれ Monad/PNG と略し、節数を記す。また、『(人間)知性新論』は NE と略し、その後には部・章・節をそれぞれ大文字のローマ数字、算用数字、小文字のローマ数字で記す。訳出に当たっては、工作舎版著作集のほか、『形而上学叙説』(河野与一訳、岩波文庫、一九五〇年)、『单子論』(河野与一訳、岩波文庫、一九五一年)、『人間知性新論』(米山優訳、みすず書房、一九八七年)を参照した。

Mendelssohn, Moses: *Gesammelte Schriften. Jubiläumsausgabe*, Berlin 1929-. Reprint: Stuttgart-Bad Cannstatt 1971.

[Sulzer, Georg] [Kurzer Begriff]: *Kurzer Begriff aller Wissenschaften und andern Teile der Gelehrsamkeit*, 2. Aufl., Leipzig 1759. Ders., *Vermischte philosophische Schriften*, Leipzig 1773, Bd. 1, Reprint: Milton Keynes 2010.

Wolff, Christian [Psychol. empir.]: *Psychologia empirica*, Frankfurt & Leipzig 1732. Nachdruck der Ausgabe Frankfurt & Leipzig 1738: Hildesheim 1968.

なお、引用に当たって、綴りは現代の正書法に従って直した。ただし、ライプニッツにおける fonds と fond に關してのみゲルハルト版の表記をそのまま残した。

註

(一) 本稿はロルフ・エルバーフェルト氏主催のコロキウム「根拠なき根拠 (Gründe ohne Grund)」における報告のための

草稿である。

(2) ヘルダー研究者のアーントラーによる論考 Hans Adler, *Fundus Animae - der Grund der Seele*, in: *DYjs* 62 (1988/2) は「魂の根底」という概念に関する最も優れた論考であるが、ライプニッツの用法を見落としている点で不十分である。

(3) ライプニッツの用例を検討する際には、文献学的な問題をあらかじめ解決しておく必要がある。というのも、フランス語には同じくラテン語の *fundus* から派生した *fonds* と *fond* という二つの単語があるが、ライプニッツは両者を混同して用いており、概して *fond* を用いるべきところに *fonds* を用いる傾向があるからである。なお、『人間』知性試論』も、初版に相当するラスベ版では *fond* と表記されている箇所がゲルハルト版著作集では *fonds* となっている箇所も多い (cf. V, 66; NE, I.1.i; V, 72; NE, I.1.iv etc.)。